

斗)にして、各月の使用水を見れば左の通りである。

月別	使用量 立方米	枧目換算 石	月別	使用量 立方米	枧目換算 石
一月	容、三〇、六	三九、七四、五	二月	容、四〇、二	三七、四〇、一
三月	容、九〇、五	三九、四、一	四月	容、七四、四	四三、一七、〇
五月	容、九七、七	四二、二二、九	六月	容、九三、八	四九、七三、六
七月	容、七三、〇	四三、九五、四	八月	容、九七、四	四一、八三、二
九月	容、二六、六	四三、四七、七	十月	容、三六、一	四八、九四、三
十一月	容、一〇、九	四六、三三、九	十二月	容、五八、一	三六、五二、八
合計	九三、六七、七	三、〇六一、六四、五			

尚ほ本市水道には一朝有時の爲め、消火栓三百四十七個を設けて市内の要所に配置し、その平時の水圧は五十呎とし、火災等の時には百五十呎の水圧を有せしめてある。

第十四編 言論機關

第一章 新聞

第一節 日刊新聞

佐賀市に於ける言論機關としては、市制施行前から既に佐賀新聞、肥筑日報の二ツありて社説に、雑報に、

各便利なる筆を揮ひ、市制施行後、幾多の新聞起りて市政は勿論、県政に、或は外交、経済、其他に堂々の筆陣を張り、指導、啓発、誘掖に努めて来た、其間、社運の盛衰も免かれざる所であつたが、時勢の変遷に連れて他府県の新報紙も亦、漸次市内に入込み支局を設置するものがあつた。

佐賀新聞

佐賀新聞

は明治十七年八月の創刊で、初め株式組織の下に江副靖臣社長となつたが、二十二年、その個人経営となり「佐賀自由」または「佐賀」と改題し、三十二年四月再び「佐賀新聞」と復称するに至つた、位置は松原町松原神社前の稍南方に在り、明治四十年社屋を同所に改築し、同二月十一日落成式を挙行した、大正三年八月唐人町土橋側に移り、同十四年六月三十日唐人町の中程(鏡田寺の東側)に移つた、同社は新聞事業の外、県公報その他の印刷物請負を為し、此の印刷請負事業部を「尙友社」と謂つていた。

社長は江副靖臣の歿後、法学博士副島義一(佐賀郡本庄村出身)を其の椅子に据えたが、後江副の姪野口藤三之に代り、昭和九年七月合資会社組織に変更し、十一年八月野口病死後、その従兄高平邦清十二年四月より社務を總理してしたが、同十三年十一月、佐賀毎夕新聞社の買収するところとなつた。

西肥日報

西肥日報

明治十九年四月の創刊であつた、当時佐賀地方にも政党熱勃興し、機關新聞の必要を痛感するより、明治十八年末、新聞社の創立を計画し、佐賀活版会社を以て之に充て、新聞紙を発行した、其の頃佐賀県下に筑後地方を合併せんとするの議ありしを以て、「肥筑日報」と題していたが、明治二十七年「西肥日報」と改題した、前大蔵大臣武富時敏の如き、創立者の一人で発刊後一ケ年ぐらいは、自ら筆を執りて編輯に從事していた事もあつたと、蓋し事実上の社長であつたことは疑ひなし、次で村岡致遠社長となり、其の引退後暫らく社長を置かず、狩野雄一主幹として社務を総理したが後、社長となり、大正十一年三月十八日辞

任し、同日西英太郎(小城郡多久村)社長となり、七月一日佐賀毎日新聞と合同した、同社は株式組織であつたが、西社長は合同後、佐賀毎日新聞社長となつた。

創立の当時は、松原町松原通りの最西端、佐賀地方裁判所前から佐賀中學校前に通ずる街路に在つたが、明治三十四年同町中ノ小路(勸業銀行支店北側)に新築して移転した、本社は新聞部と活版印刷部に分かれ、新聞事業の外、県公報その他県庁並に一般の印刷物を印刷してゐた、初め県公報等、県の印刷物を為す者がなかつたので、知事より相談ありて佐賀新聞と共同印刷を為すこととなつたと云ふ。

佐賀日日新聞(赤新聞) 八幡小路東詰めに創立して、明治三十三年(？)、佐賀日日新聞を發刊した、初め川原茂輔等其同志としていた江副靖臣と、県会に於て意見合致せず、遂に川原等は自派機關紙の必要を感じて之を發刊したものである、その新聞用紙赤色を帯びていたので、世人これを「赤新聞」と稱へていたが、明治三十六年二月に至りて遂に廢刊した。

佐賀日日新聞(福日の添附紙) 明治四十一年十一月、前佐賀新聞記者福地嘉八に依りて、計画發行され白山町小林某宅(佐賀郵便局の西側)に社を設け、新聞紙四ツ切大のものを、佐賀日日新聞と題して發行した、本紙は福岡に於て發行する、福岡日日新聞の添附紙で本県下の福日購読者に之を配附するのである、これ福日紙が県下に割込み販売を開拓した初めで、又他府県新聞の県下に販路を拡張した魁であつた。

後同町岡部活版所、水ヶ江町新道通り表真屋の樓上、白山町御幸橋側等に移転し、次で松原町松原通りの西詰め(元西肥日場社の跡)に移る、其間紙幅も拡大し大正六年には「肥前日日新聞」と改題したが、同八年二月一日ま

た「佐賀日日新聞」と復称し、十二年頃福岡日日新聞社の経営に移りて、同社の佐賀支局となり、従来の新聞名を廢し福日本紙の佐賀版として記事を合載することゝなつた、最初の経営者福地嘉八引退して、福岡日日社から支局長を置いて之を統督している。

佐賀毎日新聞

佐賀毎日新聞

市内の弁護士田崎慶一を社長とし、副社長菊地徳治郎の経営行する所で、大正元年七月二十二日創刊号を發行した、九州日報(博多)の切替版である、社長田崎の辞任後中野権六(藤津郡七浦村)を顧問としていたが、大正三年当市の弁護士豊増龍次郎を社長とした、七年豊増、社長を辞任したので、中野顧問を社長とした、十一年四月菊地副社長は或る事情の爲め、九州日报社主吉田瘦に佐賀毎日社を譲渡し、九州日报社と合同したが、合同後も、佐賀毎日には依然として佐賀毎日としその社名、態面、総ての態度面目を保持せしめていた。

そして大正十一年七月一日、当市の日刊新聞西肥日報と合同し、西肥日報社長西英太郎を以て佐賀毎日の社長とし、西社長は西肥日報を廢刊して入て其社長となり、菊地徳治郎は相変らず副社長として経営の任に當つていた、大正十五年九月二十八日九州日报社は、株式組織に変更し佐賀毎日社を其の支局とした時西社長は此間の真相を初めて知り、之が対策を考慮する内遂に病歿し、菊地副社長も亦同社を引退するの己むなき事情に至つた、昭和七年頃豊増龍次郎を再び社長とせるが二、三ヶ月にして退任した、同社は前記の如く既に九州日报社の支局となつたので其後の事は福岡県に於て処置せらるべく、其の詳細を知らざるも、其の位置は松原町八幡小路の東詰めであつた(佐賀毎日新聞号外發行の件は、昭和十七年三月二十八日廢止せし由)

肥前日日新聞

松原町中ノ小路に社屋を建築し、石川式輪転機を運転して印刷し、大正十一年一月一日から刊行した、昭和六年六月八日「佐賀日報」と改題して朝刊、夕刊を發行するに至つたが其後福岡日日新聞の添附紙となりて發行を続け、再び独立して昭和九年二月十一日モトの肥前日日新聞と復称して朝刊新聞となつた、昭和十一年十一月、日刊をやめて月刊紙となし「月刊肥前日日新聞」として發行し（月刊肥前日日新聞とはテトおかしい名だが）兎に角斯くの如くして一縷の命脈を継いでいた。

社長は初め川原茂輔（西松浦郡）であつたが、後ち石井次郎（小城郡）となり、昭和六年当市の田中猪作之を次ぎ眞島喜三、兵藤磐根等がまた其後を継いだ、日刊から月刊となつたのは兵藤時代であつたらしいが、昭和十三年十月十日遂に失効処分となるに至つた。

佐賀日日新聞

（夕刊紙） 大正十四年七月廿二日創刊号を發行した、松原町八幡小路（佐賀区裁判所前）に於て江口嘉六が社主兼社長として經營せるもので、小型四ページの夕刊新聞であつたが、昭和十三年一月下旬頃から紙面を拡張して、普通の十六ページ型として發行している（昭和十六年五月廿二日佐賀毎夕新聞と合同した）

佐賀商報

松原町三十五番地（佐賀米穀取引所構内）に於て發行する小型の夕刊紙である、明治三十四年八月一日の創刊で、佐賀を首め各地取引所商況及び取引米の状況、其他米穀取引に關する記事を満載していた、昭和十二年頃の社長は佐賀取引所の理事（或は支配人が）久池井良吾であつたが同十四年取引所法改正され、全国の取引所を日本米穀会社に統合し、米価の如きも一定値段に統制したるにより、取引所の存在必要なきに至り、佐賀米穀取引所も解散したので佐賀商報も從て廢刊するに至つた。

第二節 月刊から日刊新聞へ

日刊新聞に就ては前記の通りなるが月刊から日刊へ發展せるものについて左の新聞がある。

佐賀民衆新聞

佐賀民衆新聞

初め大正十三年十一月二十三日「民衆日聞」と称て日刊紙を發行していたが、同十四年六月一日「佐賀民衆新聞」と改題し毎月一回の月刊紙となし、同年十月一日より月三回に変更し、昭和三年四月十八日再び日刊紙として發行した、岸川岩次郎の経営するところにして其の日刊「佐賀民衆新聞」時代には、松原町馬賣馬場に社を設けていたが、昭和四年に至り遂に廢刊する事となつた。

佐賀毎夕新聞

佐賀毎夕新聞

大正十五年五月二十日「農村青年新聞」と題して月刊紙を松原町新馬場の片田江通りに於て發行した、中尾伊八(昭都)の経営するところである、其後同年九月廿二日「佐賀自由新聞」と改題し同月二十九日「農村青年新聞」に復し、昭和二年一月十一日「佐賀自由青年新聞」となり同四年十月二十日再び「佐賀自由新聞」と復称し、同六年七月「佐賀毎夕新聞と改め日刊紙(夕刊)」を發行した、是より先き同年六月一日社を県庁通りに移したが、漸次發展して昭和十二年七月写真部を設けて紙面に写真版を掲載し、翌十三年十月末更に輪転機を据付けて印刷し、同年十一月佐賀新聞を買収して其規模を拡大し、佐賀新聞の名称を繼承して佐賀毎夕の名は同年十二月十日之を廢止した。

(その後、新聞事業も統制されて一県一社となり、他の新聞を合同して、昭和十六年五月十日佐賀合同新聞と改め朝刊、夕刊を發行した、此等の事は昭和十四年以後に属し本史の記事後なるも因に記して置く、

今は県下唯一の新聞である)

榮城日日新聞 その創刊を詳かにせざるも経営者納富武雄が、従来発行していた「佐賀」と称する月刊紙を、昭和十年十二月二十日「榮城日日新聞」と云ふ日刊紙となし、神野町の三溝より発行していたが、同一年四月二十三日に至り遂に廃刊した。

第一章 雜誌

第一節 月刊雜誌

肥前評論

肥前評論 経営者江口文吉(若翁)が社長として発行せるもので、大正十年十一月計画を立て同十一年一月十一日創刊号を発行した、創刊当時は「正和新報」と題して、伊勢屋町より月二回発行していたが一年ばかり後に、水ヶ江町枳小路に移転して大正十五年頃、「肥前評論」と改題し毎月一回発行とした、其間一時大木徳太郎を以て社長とした事もあつたが、再び江口文吉社長となりて発行を継続し昭和十四年九月三十日統制の爲め廃刊した。

肥前史談

肥前史談 肥前史談会より発行する月刊誌である、肥前史談会は大正五年の創立で中頃、暫らく中絶せるを大正十四年の冬復興して新に会則を設け、肥前史に関する事項、遺蹟等の研究調査、郷土に関する図書
の刊行、古器物、天然物の研究、並に保存等の事業を其目的とし佐賀図書館に事務所を設けていたが、後ち佐賀徴古館内に移した、「肥前史談」は同会の機関誌にして会員の調査研究を発表している、大正十五年一月「肥

前史談譚演集」第一輯を会員に頒布せるを初めとし、其後毎月一回頒布していたが、昭和二年十一月出版法に依る刊行物として同月より改めて「肥前史談」第一巻第一号を月一回発行し、爾来今日まで継続発行している。

佐嘉新報 昭和三年十二月水ヶ江町会所小路より発行、副島嘉六(愛)の経営するところにして初めは「昭和新報」と題していた、昭和四年九月「佐嘉新報」と改題して発行し、月一回の月刊誌であつたが、昭和十四年八月三十日統制に依り廃刊した。

佐賀郷友 昭和四年二月十一日を以て創刊号を発行した、其の当時は松原町松原通りにあつたが同六年頃、同町八幡小路東詰めに移転した、郷土愛は国家愛といふ感念に立つた郷土主義の月刊雑誌で、甲斐久男主幹として経営する所で、今尚ほ発行を続行している。

佐賀時論 憲政擁護の主旨の下に立つた民政党主義の雑誌であつた、菊地徳治郎が佐賀毎日新聞副社長を引退後、計畫せるもので昭和七年十月十七日第一号を発刊し、爾後毎月刊行を続けて、唐人町より発行していたが之も統制により昭和十四年八月三十一日を以て廃刊した。

此の外大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、九州日日新聞等の各社も当市に支局を設置して県下の記事を蒐集掲載して県下に販路を拡めていた。